The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スウィフトのプライド観(Ⅳ)：「樋物語」の場合
Author(s)	渡辺，孔二
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 4, p. 24-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25761
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スウィフトのプライド観（Ⅳ）
―「桶物語」の場合 ―

渡 辺 孔 二

「桶物語」は普通当時の宗教と学問の混乱，堕落に対する諷刺を意図して書かれた，といわれている．そのことは疑うべくもないが，一方見方を変えればこの物語は，伝統的思考とは相容れない個人中心的思考，即ち，プライドの敗北を，具体的にはピーターを中心としてプライドから極端な行動に走った者の敗北を呈示することにより，伝統的思考の危機を認識さし，個人中心的思考から発する混乱を排斥し，全体の調和ある秩序を維持する伝統的思考への願いを，若きスウィフトが精一杯表現しているとも受け取られる．

× × × × ×

「イグザミナ」においてスウィフトは「強欲ほど人間を極端な行動にかり立てる悪徳はない」（1710—11年2月8日木曜日号）とし，極端さは「狂気じみたほど馬鹿げたもの」（1710年10月16日木曜日号）と述べている．極端さへの嫌悪は，スウィフトの諸々の作品に述べられており，又，論じ方にも逆説的に極端さを用いているが，「桶物語」「書物戦争」だけに限ってみても次のような極端さの例がみられる．よく肥った人の身体への描写（P.46），服屋の考え方（P.76），索引及び脱線に関する現代崇拝者（モダーンズ）の原理（P.145），小人の生殖器（P.147）風崇拝者（イオリスト）の極端さ（第8節）（以上桶物語），ウォットンの心と身体のゆがみ（P.169），現代崇拝者への皮肉（P.225）くもの過信（PP.230—231），ベントリィの足と鼻のゆがみ（P.251）（以上書物戦争）．

何故，　スウィフトは極端さを忌み嫌うのか．伝統的思考はまず全体の調和を基盤としている．人間の秩序は小宇宙に於ける人間の階級的認識にあり，人間社会の秩序は人間個人の身分階級の是認にあり，人間個人の調和は内部と外部，即ち，精神と肉体の調和にある．総じて伝統的思考は「存在の鎖」によって示され，その思考は階級的秩序を大前提とし，階級

的秩序による全体の調和を求め，万物にかかる秩序を要求し，万物を類似的思考から判断する．例えば，個人の行動は独創的なるが故に価値評価されるのではなく，人間全体の調和から評価され，階級的秩序の中で容認出来得るか否かにより評価される．

桶物語における「父の遺言」は三兄弟（三子）という全体の調和を意図した伝統的思考から発しており，「父の遺言」はすべて三兄弟に共通に与えられたもので，三兄弟個別に与えられた忠告，即ち，個人中心的思考から発したもの，を含んでいない．（父の遺言はすべて「お前達」に与えられたものだけであり，しかも物語の進行過程においても，「彼等」が「彼」という単数形に移行しているのは，ピーターのごまかしの開始によってである．）父の遺言は人間一般に共通に与えられた聖書の如く，三兄弟に全く同等に与えられたものであり，又，父の与えた「上衣」は福音書の如く，三兄弟の生きて行く上の指針であり，三兄弟に与えられたものは「全く同型」のものである．スウィフトの発想法は伝統的発想法であり，個人の特異性に着目しているのではなく，全体の秩序を念頭においており，桶物語においては，この全体の秩序が個人中心的思考，即ち，プライド故に生じた極端さにより破壊される過程を描き出している．（桶物語自体の有している構成にもその反映がうかがわれ，「脱線」という節自体が一つの極端さへの暗示を提出している．）

「父の与えた上衣を変形してはならないし，三兄弟は共に行動し，一緒に同じ家に住まねばならない」（PP.73—74）と述べた父の遺言を与えられた三兄弟は7年間、父の遺言を守り、共に協力し，行動する．《スウィフトは数字をよく用いている．例えば「ガリバー旅行記」に例をとって，1という数字を除き，さらに一番小さい桁数に用いられている数字から分類すると，2—121，3—106，4—44，5—35，6—44，7—13，8—14，9—14．（エヴリマンの1960年版「ガリバー旅行記」をテキストにして分類した．）さて，桶物語の，この小論に関係する数に限定して論じてみる．まず，三兄弟ということであるが，普通の解釈によると三兄弟は，ローマ・カソリック教・英国教会・長老教会などの国教反対者を意味するものであるが，3という数字にこだわるならば，別の解釈も可能である．即ち，伝統的思考による混乱，多様の融合，即ち，調和ある秩序への願いを，父の遺言による三兄弟の統一の可能性を暗示しているとも見られる．同様に，

この場合の7年間ということも，普通の解釈によると，カールの「手引き書」（P.333）にもあるように，キリスト教史における最初の700年間を意味するのであるが，桶物語の「紹介」（PP.57－58）から判断すると，3と共に「神秘的な数」である7という数字を，意識的に別の意味を含めて用いているとも解釈出来る．即ち，「ガリバー旅行記」の中でのリリパット皇帝（ジョージⅠ世）への諷刺のところ（Ⅰii）で述べられている「治世7年」という語句と同様，皮肉な，しかも神秘的な響きの中に，危機の観念を導入しているとも解釈出来る．桶物語において秩序が破壊され個人中心的思考が表面に現われて来るのは，父が遺言を与えてから7年目であり，この桶物語における7という数は調和から混乱へと移行する過渡期的危機感を暗示していると受け取られる.》 そしてその間一度も「なぜ父の遺言を守らねばならないのか」と反問する個人中心的思考から発する疑いを抱いていない．即ち，三兄弟の思考方法は，ここにおいては同時代的であり，混乱を避け秩序を維持する伝統的立場に立っている．

しかし，父の遺言を与えられて7年目に成人して都会へ出て行き．そこで「金銭公爵夫人，大称号マダム・傲慢伯爵夫人」（P.74）に恋して後，「父の遺言」を守るという伝統的思考に基盤を置きながら，それとは相矛盾する秩序をかき乱す個人中心の，極端な行動に出る．即ち，富，地位，虚栄のために極端な行動に走るのである．「飲酒，女郎買い，門番殴打，淋病の感染，貸馬車只乗り，借金，他人の妻の寝取り，執行官殺害，貴族を利用――等々40の乱行」（PP.74―75）という描写は極端さの一例と受け取られる．

富，地位，虚栄というものは人間につきまとう避けがたい欲望であり，それ故に，かかる欲望に発した個人の思考の変化は警戒されねばならない．欲望は伝統的思考に変化を与え，個人中心的思考，即ち，プライドの表出をうながし，プライドは極端さに個人を走らせ，極端さは個人を蝕ばみ，全体の秩序をも破る可能性を大いに秘めている．

そのことは，まず第一段階として部分的に衣服に関する考え方（第2節）で論じられ，その後，全体的に，ピーターの行動を通して詳述されている．

人間個人の調和は精神と肉体との調和であり，又，内部と外部との調和でもある．伝統的立場にたてば，人間の内部である人格と外部に属する衣

服は調和が保たれなくてはならない。衣服は人間の魂のおおいであり，決して魂ではありえない．しかし桶物語の中の服屋の如く，宇宙と衣服とを同一の場において解釈すると，「宗教はマントであり，正直さは靴であり，自愛は外套，虚栄はシャツ，良心は半ズボンであり，不潔，わいせつのおおいもの」（P.78）ということになり，衣服即ち人間という思考が生じて来る．町を歩いているのは衣服であり，人間は衣服で差別を生じて来る．「金の鎖をぶらさげ，赤いガウンをまとい，白い杖をもって馬にまたがって」いれば市長とみなされ，裁判官もビショップも同様の基準から判断される．人間の内部（精神的要素・人格）は無視され，外部（衣服）によってのみ人間は判断される．このような服屋の思考と類似的な，個人中心的な，独断的な思考に三兄弟は染って行く．

彼らが都会へ出て1ケ月もたたないうちに肩章をつけることが流行した．ところが，父の与えた上衣は「簡素で全く装飾のついていないもの」であったし，更に父の遺言は彼らの上衣に「1本の糸も加えてはならないし，1本の糸をも減じてはならない」ことを明記していた．彼らの上衣は理性と上品さは有していたが，父は全く個人の独創的，独断的思考を禁じていたのである．しかし，個人中心的に考えれば，肩章をつけないと，彼らの価値は他人に比して落ちることになる．肩章をつけているかいないかによって個人の価値が評価される．しかし，三兄弟は伝統的立場に立とうとしたため，父の与えた上衣の「簡素さ，装飾のなさ」に固執し，その結果，個人中心的思考から判断すると，災難にあった．肩章をつけていないため劇場へ行けば一番安い12ペニーの最上階の桟敷へ入れられるし，酒を飲もうと思ってローズ酒場へ行くと酒場の給仕人が酒を売るわけにいかないという．女性に会いに行くと肩章をつけていないという理由で玄関払いをくらった．

流行は一時的，地域的なものであるが，流行を是認する思考は三兄弟の思考の混乱を来たした．中でもピーターの思考は顕著な変化を来たしてくる．伝統的立場に立ち，父の遺言を守り，秩序を維持する態度を示しながら，実は現実生活の思考上では個人中心的思考に変り，人間を判断する場合に人格と衣服の調和に着目するのではなく，人格と衣服をきり離し，むしろ衣服によって人間の価値を決める，流行を追う人間の思考を抱きはじめる．その証拠にピーターの思考は肩章をつけるという流行を父の遺言から

判断する伝統的なものから，肩章をつけ得るためには父の遺言を如何にごまかさねばならないかを指向する個人中心的なものに移行している．

ピーターはいう．「たしかに父の遺言書には文字通り肩章ということばはないが，しかし肩章ということばと同じ音節はあるはずだ．」（P.83）彼らはピーターの言葉に従って遺言書を調べてみた．しかし肩章の第一音節がいくら調べても見当らない．とピーターは次のようにいう．「肩章ということばも肩章ということばの有している音節もないが，肩章ということばを構成している文字（アルファベット）はあるはずだ．」（P.83）そこで彼らは一生懸命 SHOULDER—KNOT を構成している文字をひろいはじめた．そして S. H. O. U. L. D. E. Rまではひろうことが出来たのだが，その次のKという文字が見当らない．するとピーターは「Kという文字は現代の正しくない文字で，学問のあった時代にも古代のどんな書物にもない文字だ．Kというのは正しくはCと書かれるべきだ」（P.84）と主張した．即ちKNOTはCNOTと書かれるべきだといった．学識のあるピーターの言は，たちまち他の二人に受け容れられ，彼らは肩章をつけて威張って町を歩くことになる．

こうしたピーターの思考は桶物語・書物戦争その他スウィフトの作品に多く出て来る批評家達の思考に類似しているのだが，ピーターの思考には，自分を絶対的なもの，神に匹敵するものとの考え方がある．全体の中で自己を考えるのではなく，個人対個人の中で自己を考え，他人を軽蔑し，自己中心的な尺度で万物を考える．肩章というものを衣服の有している調和から判断するのではなく，他人と比して有利な立場に立てる手段と考え，肩章をつけねばならない理由を自分勝手に考え出し，肩章をつけ得る根拠を自己中心的に解釈する．金のレースをつけることが流行した時も，上衣の裏張りに真赤なしゅすを使うことが流行した時も銀のへり飾りをつけることが流行した時も，刺しゅうをするのが流行した時も，同様の思考方法をとって父の遺言をごまかしている．父の遺言の調和ある秩序は現実的にもくずれ，それに変って理性とは程遠い，ごまかしの世界にピーターは入り込んで行く．

ここで今一度注目しておかなければならないことは．ピーターの思考がはじめから自己中心的ではなかったということである．成人するまでの彼の思考は伝統的立場に立ち，父の遺言を忠実に守っていた．それが富，地位，

虚栄といった欲望を契機として変化しだした．従って彼の思考は伝統的思考の変型としての個人中心的思考といえる．それ故に，ピーターは伝統的思考と個人中心的思考との「果てしなき矛盾」（P.89）に悩み，「良心の呵責」を生じる．さらに流行を契機とした伝統的思考のごまかしは，流行を追いたいという個人中心的思考，即ち，全体の調和を無視したピーターのプライドによって，プライドと伝統的思考のかっとうを生じさし，又，ピーターは伝統的思考の不可避的歴史的基盤から「良心の呵責」を感じ，伝統的思考とプライドという「果てしなき矛盾」に悩みはじめた．そして「果てしなき矛盾」に疲れ果てたピーターは父の遺言書を他の二人を説得して金庫にしまい込んでしまった．

即ち，伝統的思考に訣別しようと試みた．

しかし，金庫にしまい込んだからといって，今までつちかわれていた伝統的思考が絶無になることは不可能である．その現れとして，遺言を「金庫にしまい込みたい」と願う心的状態と「良心の呵責」を避けたいと願う心的状態とが，個人中心的思考と伝統的思考の錯綜した状態をあらわしている．父は遺言の中で，もし父のいう約束を守らなければ「永遠の呪「（P.89）を彼らに与えると述べているが，そのことと相関連して，スウィフトは，伝統的思考への願いをこめて，伝統的思考をごまかすことが必然的に「良心の呵責」を生じることを暗示することにより，伝統的思考につちかわれていながら個人中心的思考を欲望故に抱こうとする人々に，伝統的思考の危機と共に伝統的思考の心要を警告している．

父の遺言という調和ある秩序を破壊する結果を生じる個人中心的思考に走ったピーターは遺言を金庫にしまい込むという行為を通して罪を意識しはじめる．しかし，罪の意識のあるピーターのとった道は良心の呵責を和らげる方向であって，個人中心的思考に訣別することではなかった．個人中心的思考に訣別するほど，ピーターは意志の強固な人間ではなかった．いや，ピーターのみならず一般の人間の心は，スウィフトが「三位一体に関する説教」で述べている如く，「弱い，ゆれ動くもの」であって，心の誘惑に毅然とたち向えるほど強固なものではない．それ故に個人中心的思考は危険であり，極端に走る可能性を大いに有している．伝統的思考を無視する，限度をわきまえぬプライドは，それ故に異端的なものとみなされ，攻撃の矢面に立つのである．個人中心的思考を抱きはじめているピーター

にとって，良心の呵責を和らげようとする行為は，むしろ，新しいより多くの，より深い良心の呵責を伴って帰って来る．

父は死ぬ時，彼らに「一つの家に一緒に住むべし」ということをいった．ピーターは自己中心的に父の遺言を守っているということを意識するために，又弟達に意識させて，自分の行動を是認さすために，ある領主の大邸宅を手に入れ，兄弟が一緒に住むことになった．しかし大邸宅を手に入れた手段はごまかしであったし，大邸宅を手に入れるとピーターの態度は一変し，良心の呵責が和らぐどころか，逆に前にも増して個人中心的思考へと変化していった．ピーターは大邸宅という豊富さの前で，傲慢さの権化と化して行った．ピーターは服装をかえ，生活態度をかえ，自分の呼び名までかえた．しかも，大邸宅の主であるという傲慢さを維持するために，いろいろなごまかしをやった．土地をだましとる山師会社を作って金をだましとり，なんの効き目もない，全然薬など用いない「虫下し」を考え出したり，癇癪がすぐ治るといって催眠術めいたことをして金をとり，「囁き事務所」を作っては困っている人達をだまし，燃えないもののための火災保険会社を作っては金儲する．罪人さえもだまして金をまきあげた．こうして，ピーターは伝統的思考を去り，個人中心的思考から極端さへと加速度をつけてころがり落ちていった．流行を契機として訪づれた，秩序の調和を閑却した，個人中心的思考がピーターを支配し，ピーターはスウィフトの忌み嫌う極端な人間として描かれている．極端さへ走った結果は「序文」に出て来るよく肥った人の如く，自らの招いた重圧に抗しきれなくなり，自らのプライドに自らが蝕まれ，他人を傷つけ，自らも傷つき，しかもそのことを省みない悪魔の様相を呈して来る．

「要するにプライドやらごまかしやらで，あわれなピーターは気がおかしくなり，世にも不思議なことをしだした．」（PP.114—115）自らを「全能の神」と呼び，帽子を三つ重ねてかぶり，腰には大きな鍵束をつけ，手には釣り竿を持って歩いた．人とあいさつするときは手でなく足を差し出した．人がこのあいさつの仕方をこばもうものなら，その足を相手のあごのところまであげて相手の口をけった．自分のそばを人があいさつしないで通ると，ものすごい勢で息を吹きかけ，相手の帽子をぬかるみへ吹き落した．家ではマーティンやジャックの妻のみならず，自分の妻までも蹴って外へ出し，代りに町を歩いている三人の婦人を連れ込め，とマーティンと

ジャンクに命令した．地下室を釘でとめて弟達に酒を飲まさない．パンの皮でも食べ残そうものなら，勿体ないことをするな，これはすばらしい羊肉じゃないか，といって無理に食べさせる．しかも発作のおこらないときでも，みだらなことを口にし，ひどく強情で独断的である．明らかに嘘とわかることを平気でいう癖がありながら，自分のいうことを信じようとしないと，ものすごい剣幕で怒る．そして「自分は今までに一度も嘘をついたことはない，お前達に真実をのみ述べている」（P.121）と言い放った．

このようにピーターは傲慢さの権化と化した．そしてその傲慢さ故に弟達は大邸宅を出て下宿する結果となり，父の遺言の「仲良く一つの家に一緒に住むべし」という一つの要求も守れなくなってしまった．父の遺言を守っているという偽りの空虚な自尊心も崩壊し，大邸宅の主であるという傲慢さも今は彼の心を狂わしてしまった．ピーターは「永遠の呪」に蝕まれ，「果てしなき矛盾」の道を歩まねばならなくなった．ピーターの敗北は極端さの敗北であり，それは個人中心的思考，即ち，プライドの敗北である．

× × × × ×

〔テキスト〕

A. C. Guthkelch and D. Nichol Smith (ed.) : ***A Tale of a Tub*** (Oxford, 1958).

本文中の頁数はすべてこのテキストの頁数を示す．